

旅するヒーラー

— ライラ・ララミ『ムーア人の物語』にみる クレオールの形象

深瀬 有希子

第一次世界大戦後の1920年代に展開したハーレム・ルネサンスと呼ばれる芸術運動に深く関わった画家アaron・ダグラス（Aaron Douglas）は、自由民主主義の理念を掲げるアメリカ合衆国におけるアフリカ系アメリカ人の過去と現在を、総合的キュビズムの手法により公共空間に描き出した。世界大恐慌を経てフランクリン・ローズヴェルト政権のニューディール文化政策期に入ると、ダグラスは活動拠点を北部から南部に移し、例えば1936年には、テキサス州百周年記念博覧会の一部となり注目を浴びた黒人文化展示館を飾る壁画を制作した。しかしいまや、それら四枚連作の最初のパネルに描かれた図像の詳細を知るのは難しい¹。よって本稿では、その完全に失われてしまった壁画の主題となったエステバニコ（Estebanico）なる人物、すなわち、16世紀に新大陸アメリカと見なされたフロリダからテキサスさらにはメキシコに至るまでを、スペイン人コンキスタドールとともに探検したモロッコ人を、文学の営みにおいて修繕回復することを試みる²。具体的には、まず始めに20世紀初頭から前半に繰り広げられたエステバニコ批評という「額縁」^{frame}を概観し、その後はそれを踏まえて、モロッコ系アメリカ人作家ライラ・ララミ（Laila Lalami）の*The Moor's Account*（2014）に描かれたクレオールという行為遂行的形象としてのエステバニコ像を分析する³。それにより示すのは、過去の言説によってでっちあげられたエステバニコの姿がララミの手によって書き改められる様である。

1 エステバニコを囲む「額縁」^{frame}

アaron・ダグラスはなぜ、新大陸に足を踏み入れた初のアフリカ人エステバニコを壁画に描いたのか。ダグラス自身がその動機について語る資料は見つからないものの、彼がエステバニコの壁画を創作した前後の時代に、歴史や文学の分野において示されたエステバニコ批評を、いわば絵画の「額縁」にみたてて概観していくことは可能であろう。そこでまず始めに取りあげるのは、元奴隷の黒人批評家リチャード・ライト (Richard Wright) による1902年の論考である。ライトは、16世紀から本格化した大西洋奴隷貿易の歴史を説明するなかで、エステバニコをして「白人なみの如才なさど能力を示し、また、野蛮人のなかで自己管理を維持して探検を続け、最終的には治療者として類まれな地位を得た人物」と説明する (226)⁴。さらにライトは、大西洋奴隷貿易によって新大陸に連行されたアフリカ人には読み書き能力を持つ者もいたことも指摘しつつ、今後もエステバニコ研究を通じて、より能力のある人物に合衆国における正義を探求してほしいと述べて論を締めくくる (228)。

そこで、元奴隷のライトが託した期待に応えるべく登場した人物こそ、1895年に論文 *The Suppression of the African Slave Trade to the United States of America: 1638-1870* により、アフリカ系アメリカ人として初めてハーヴァード大学にて博士号を取得したW.E.B. デュボイス (W. E. B. Du Bois) であった。彼の代表作である *The Souls of Black Folk* (1903) よりおよそ20年後の1924年に出版された *The Gift of Black Folk* の第一章 “The Black Explorers” において、デュボイスはエステバニコがネイティヴ・アメリカンに殺害された理由—^{frame}毘—を次のように説明する。

[T]hey were puzzled because this black man came as a representative of white men. “. . . When they heard this, many of the chief men consulted together and resolved to kill him that he might not give news unto these brethren where they dwelt* and that for this cause they slew him and cut him into many pieces

...” *The story that Estevanico was killed because of his greed is evidently apocryphal.

これによると、白人コンキスタドールのなかで唯一の黒人であったエステバニコは通訳者の役を担っていた。エステバニコはネイティヴ・アメリカンを助けるべく、同行者白人コンキスタドールの企みを彼らに暴露しようとする。しかし、ネイティヴ・アメリカンへのエステバニコの好意が皮肉にも彼に対する不信感を募らせた、とデュボイスは述べる。またデュボイスは註釈を用いて、当時流布していた見解—すなわち、エステバニコがネイティヴ・アメリカンに処刑されたのは、彼がネイティヴ・アメリカンの女性に対して強い欲望を抱いたからだ—に対し、「出典が不確かなでっちあげである」と切り捨てる。

デュボイスによる本書 *The Gift of Black Folk* が、出版当時の1920年代アメリカ合衆国における人種および民族関係を考察するうえで興味深いのは、それがナイツ・オブ・コロンバス (Knights of Columbus) というコネチカット州はニュー・ヘイヴンに本拠地を置くカトリック系出版社の後押しによって頒布されたという事実にある。本書2009年版に寄せられたカール・アンダソン (Carl Anderson) による「序文」からは、本書初版が非プロテスタントのエスニック作家による他作品とともに、1920年代ネイティヴィズムに対する批判を意図して出版されたことがわかる。

In recognition of anti-black racism, anti-Semitism, and the anti-German sentiment created by World War I, three books would be published by the Knights of Columbus Historical Commission: *The Jews in the Making of America*, by George Cohen, *The Germans in the Making of America*, by Dr. Frederick Schrader, and *the Gift of Black Folk*. . . . We can appreciate how revolutionary this book was in 1924, when Jim Crow laws littered the books in many states, segregated schools were often the norm, and most American believed that white Protestant men were the only heroes in American history.

またさらにアフリカ系アメリカ文学史のなかでデュボイスの本書出版の意義を確認するならば、この1924年という年は、ハーレム・ルネサンスの金字塔のひとつであるアフリカ系アメリカ文学文化批評アンソロジー *The New Negro* の出版をその翌年に控えた時分であった。よって、デュボイスによって修正されかつその後アロン・ダグラスによって視覚化されたエステバニコ像は、ハーレム・ルネサンスが定義した黒人性、すなわち「ニュー・ニグロ」の表象として機能することを企図されていた、とひとまずは言えるだろう。

エステバニコに関わる批評は、ハーレム・ルネサンスがその終焉を迎えニューディール期へと移行した後も依然として続いていた。その一例に、1940年に黒人思想家政治家レイフォード・ローガン (Rayford Logan) による論考を挙げることができる。ローガンは、デュボイスより約30歳年下にあたり、彼もまたハーヴァード大学で博士号を1936年に取得しているが、その年こそまさにダグラスがエステバニコの壁画を発表した年であった。元奴隷のリチャード・ライトがかつて後進に対して抱いた期待に応えるべく、エステバニコ研究はデュボイスが「才能のある十分の一 (Talented Tenth)」と規定したアフリカン・アメリカンのエリートたちによって継続された。実際、以下で扱う論考をローガンが発表した1940年には、彼は黒人大学として名高いハワード大学で教鞭をとっており、なおかつ、ローズヴェルト政権へのアドバイザー的役割を果たした「ブラック・キャビネット」(Black Cabinet) の一員として政界での経験も積んでいた。

さてローガンは論考 “Estevanico, Negro Discoverer of the Southwest: A Critical Reexamination” にて次のように述べる。アメリカ南西部400周年記念では、スペイン人探検者のフランシスコ・コロナド (Francisco Vázquez de Coronado y Luján, 1510-1554) ばかりが取りあげられ、彼らに同行したアフリカ人の元奴隷で後に探検家となったエステバニコの存在は無視されている。特にローガンが注目するのは、エステバニコの体験が原語であるスペイン語から英語に翻訳された経緯およびその過程で生じた誤訳が、エステバニコの人種民族アイデンティティに対する理解に与えた影響についてである。

ローガンによれば、エステバニコの存在はまず、彼とともに8年間におよぶ探検をしたアルヴァール・ニュネス・カベサ・デ・ヴァカ（Álvar Núñez Cabeza de Vaca, c.1490-c.1560）によるスペイン語の著書*La Relación*（後に*Naufragios*と改題）が、1542年と1555年に出版されたことにより世に示された。このカベサ・デ・ヴァカによるスペイン語原典が初めて英訳されたのは約80年後の1625年であり、それは、スペイン語からイタリア語に翻訳されたものがサミュエル・パーチェス（Samuel Purchas）により短縮版の形で英訳されたという経緯を持つ。さらに時を経て1851年に至ると、1555年版スペイン語原典がバッキンガム・スミス（Buckingham Smith）により英訳され、その後1905年には、1542年版スペイン語原典がファニー・バンデリエール（Fanny Bandelier）によって英訳された。

このように、原語であるスペイン語による出版から、イタリア語への翻訳をいったん介して、約300年の時を経て英訳されたこの『体験記』について、ローガンが説明するのは、原作者カベサ・デ・ヴァカが同行人エステバニコの出自について記した部分である。

In all of these sources and translations Estevanico is referred to as a Negro. So far as the writer has been able to discover the only reference to Estevanico as a “Moor” is to be found at the end of Cabeza de Vaca’s *Relación* where it is stated that the fourth survivor *se llama Estevanico; es negro alárabe, natural de Azamor*. Practically all translators render *alárabe*, by Arab None of these [translations] apparently questioned the fact that Estevanico was a Negro. Even the Bandeliers were rather cautious in raising the question. The introduction states: “It is therefore not unlikely that he was not a negro proper, but from one or the other of the tribes of the desert.” . . . Mr. Hallenbeck then adds: “The Spanish word ‘negro’ means a black person; and in Núñez’s time was applied to people of Hamitic and Malayan blood as well as to negroes. Diego de Guzmán, who saw Estevanico at Sinaloa, says that he was a *moreno* — a brown man.” (307-308)

ローガンがまず注目するのは、原作者カベサ・デ・ヴァカがエステバニコについて「アラブ系の黒人であり、アザムール出身である」と記している点である。それに続き、原作より約360年後に出版された1905年版の翻訳者であるバンデリエールは、「彼が本当の黒人ではなかったというのはいえぬことでもないが、彼は砂漠の部族の出身ではあったのだろう」と、エステバニコの出自については慎重に、というか歯切れの悪い言い方で説明している部分を、ローガンは指摘している。さらに本引用の後半にてローガンは、カベサ・デ・ヴァカの時代におけるスペイン語の“negro”の指示対象には、ハム族やマレー系も含まれていたことに言及しつつ、ディエゴ・デ・グズマンがエステバニコは「黒人」ではなく「茶褐色の人物」と述べたという事実を紹介している。

このようにローガンは、エステバニコの人種民族に関してやや錯綜する説明を並び立てていくが、続く引用に見られるのは、エステバニコの“alárabe”という属性よりもむしろ“negro”という属性のほうを強調し、それを1940年代アメリカ合衆国のコンテキストに持ち込もうとするローガンの意図である— “The weight of the evidence seems also to lead to the conclusion that Estevanico was a Negro in the North American sense of the word. He was as hardy as any of the Spaniards; he became a skilled medicine man” (314)。つまりローガンは、小文字で始まるスペイン語の“negro”を大文字で始まる英語の“Negro”に書き改め、前者が持つ指示対象を北米というコンテキストに限定し、それに国家的性格を付与することで、モロッコ人探検家エステバニコをアフリカ系アメリカ人としているのである。ローガンは、エステバニコを「勇敢で熟練した治癒者」と見なしながらも、彼の最大の過ちは自身の「物語」を書き残さなかったことだと述べて論を閉じる (314)。

2 薬草と語りをもたらす自由

しかしながら、このローガンの嘆きから75年後の2014年に、エステバニコの声は、モロッコ系アメリカ人女性作家ライラ・ララミによって小説 *The Moor's Account* となり蘇った。本小説はムーア人探検家エステバニコを主人公とし、彼の名はMustafa ibn Muhammadとされている。作品は、一人称（“I”）によって、生まれ故郷アフリカや奴隷として渡ったスペインでの幼少期（過去）の話と、北米新大陸を探検し生き残る青年期（現在）の話とが、作品の半ばまで一章ずつ交互に語られていく。元商人のムスタファ（エステバニコ）は、故郷アザムールを襲った飢饉で苦しむ家族を助けるため、自ら奴隷となる。ナルヴァエス（Pánfilo de Narváez）によって率いられた総勢六百人のコンキスタドールは、1527年にカリブの島々を経てフロリダ州タンパ・ベイ近くに到着する。彼らはネイティヴ・アメリカンとの交戦や病に苦しみながらメキシコ湾岸を西へ進むも黄金は見つからず、最終的には四人の探検者、すなわち、エステバニコ、ドランテス、カスティジョ、カベサ・デ・ヴァカ（Estebanico, Andrés Dorantes de Carranza, Alonso del Castillo MaldonadoCastillo, Álvaro Núñez Cabeza de Vaca）が生き残る。作品の半ばを過ぎて物語の展開が一気に加速するのは、エステバニコを含むこれらの探検者が、ネイティヴ・アメリカンによる囚われの身の立場から旅するヒーラーとして身を立てていくくだりである。以下では、彼らが旅するヒーラーとして行為遂行的にそのアイデンティティを作りあげながら自由を求める姿を追いつつ、前節でローガンによってなされたエステバニコの出自の「北米化」について考察していく。

まずはスペイン人コンキスタドールが一転して隷属状態におかれた事実の例として、ララミの *The Moor's Account* からの次の引用を参照してみよう。そこではエステバニコの主人でもあったドランテスが、目が不自由であるネイティヴ・アメリカンの一家に仕え、彼らのために日々の家事一切を取り仕切っている様子が描かれている。

Nowadays he [Dorantes] had the good fortune, he said, of working for a family that did not require him to go on hunts, but instead gave him more mundane and therefore more manageable tasks: he cooked their meals, washed their clothes, set up their tent, and struck it when it was time to move. The reason he did this was because all of them—grandfather, father, mother, and three boys — were blind. . . . It was the pox that made them blind. . . . I suspect it was from someone who traded in New Spain. (215)

この描写でまず確認すべきは、ヨーロッパから新大陸へ持ち込まれた天然痘によって多くのネイティヴ・アメリカ人が命を落とし、エステバニコが出会ったネイティヴ・アメリカ人もその歴史的事実の例外ではなかった点である。興味深いのは、ここに見てとれるネイティヴ・アメリカ人とヨーロッパ人探検家との間の主従関係が、およそ一世紀後にメアリー・ホワイト・ローランドソン (Mary White Rowlandson) によって著された「インディアン捕囚体験記 (Indian Captivity Narratives)」の形態をすでに示している点である。

このような事態、つまり、ネイティヴ・アメリカ人によるスペイン人ドランテスの捕囚を目の当たりにしたエステバニコは、奴隷としての己自身とドランテスとの間にもはや従属関係は無くなったと考えるに至る。そこでエステバニコは、インディアン部族に存在する尊敬されるべき立場としてのヒーラーと親密な関係を築くことにより、自由への道を拓くことに成功する。例えば以下の引用は、エステバニコが薬用植物 (“zaatar”) を用いてドランテスの腹痛を治すと、それを見ていたネイティヴ・アメリカンのヒーラーが外国由来の治癒法に興味を示す場面である⁵。

[I] went into the fields behind the camp to look for some zaatar, which I used to make an infusion. Drink this, I said, kneeling beside Drantes. . . . Come now, I said. Drink. Although he fought me about it, he eventually drank the zaatar —he had tried it before and knew it would work. When I looked up, I

noticed that the Avavares' shaman was observing us. His name was Behewibri. . . . What did you give your brother? I showed Behewibri the zaatar. Ah, he said. He called it by its Avavare name and pressed the leaves of the plant between his fingers, releasing its aroma into the air. He wanted to know how I had prepared it, how much of it I had used, and whether it was safe to give to a child as well as to a man. I told him what I knew: it was a simple remedy my mother used whenever I complained of a stomachache, and it was safe to use on anyone. (224-225)

ここにおいて、エステバニコはかつてより知っていたアフリカの民間治療法を新大陸にいわば「接ぎ木」し、同時にその逆の形として、ネイティヴ・アメリカンが新大陸固有の治療法をモロッコ人エステバニコに伝授する。

しかし、この探検の実際の遂行者でありかつ記録者でもあったカベサ・デ・ヴァカ自身は、己の生存を目的として行ったネイティヴ・アメリカンのヒーラーとの関係構築の経緯をいかに著したのだろうか。ここで再び、前節にて触れた翻訳の問題に立ち返りつつ、スペイン人コンキスタドールがなした治癒行為の場面を見ていくこととする。注目すべきは、スペイン語原典に対して、1905年のファニー・バンデリエールによる英訳と、現代の批評家ロバート・グッドウィン（Robert Goodwin）による英訳とでは、治癒行為をなす主体の翻訳に違いが見られるという点である。そこでまず以下では、バンデリエールによる英訳を確認してみよう。

When I got close to their huts I saw that the sick man we had been called to cure was dead, for there were many people around him weeping and his lodge was torn down, which is a sign that the owner has died. I found the Indian with his eyes rolled back, without pulse and with all the marks of death, at least it seemed to me, and Drantes said the same thing. I removed the mat with which he has covered, and as best I prayed to our Lord to restore him to health as well as any others in need. After I had made the sign of the cross and

breathed on him many times, they brought his bow and presented it to me, as well as a basket of ground prickly pears, and then they took me to many others who were suffering from sleeping sickness. (Cabeza de Vaca, *The Shipwrecked Men* 82-83, translated by Bandelier、下線強調は筆者による)

上記のバンデリエールによる英訳を見てみると、一人称単数の “I” という語の使用あるいは多用によって、この『体験記』の語り手であり書き手であるカベサ・デ・ヴァカ自身が、治療行為をネイティヴ・アメリカンに施した点が明示されている。しかしながら次の引用においては、批評家グッドウィンは、上記引用における下線部に注目することによって、この治療行為が、カベサ・デ・ヴァカではない人物——前後の文脈も含めて判断すると、それはつまり、エステバニコによってこの治療がなされた可能性を示している。グッドウィンによる英訳の前に、問題視されている下線部分のスペイン語原典を見てみよう。

Yo le quité una estera que tenía encima, con que estaba cubierto, y lo major que pude apliqué a nuestro Señor fuese servido de dar salud a aquél y a todos los otoros que de ella tenían necesidad. Y después de santiguado y soplado muchas veces, me trajeron un arco y me lo dieron, y una sera de tunas molidas, y lleváronme a curar o otoros muchos que estaban malos de modorra, . . . (Cabeza de Vaca, *Naufragios* Capítulo XX “Cómo otoro día nos trajeron otoros enfermos”, 下線強調は筆者による)

上記のスペイン語原典を踏まえて、グッドウィンは以下のように述べかつ英訳する。

But while “I,” Cabeza de Vaca, did all this, in the next sentence we read that “the man had the sign of the cross made over him and was blown on many times.” Cabeza de Vaca makes no attempt to say that “I” made the sign of the cross, or

the “I” blew on the patient. For some reason he tries to imply that he was the medicine man by suppressing the protagonist’s real identity, rather than simply making a false claim. But, because of that curious honesty, he in fact implies that it must have been someone else who did the cure by shifting from “I” to the impersonal passive voice at the crucial moment. There is little question that had Cabeza de Vaca made the sign of the cross and done the blowing, then he would have said so loudly. (259、下線強調は筆者による)

グッドウィンがなした下線部の英訳を見ると、バンデリエールでは明示されていた一人称単数の“I”が消え去っているのがわかり、それこそがスペイン語原典の忠実な訳であるという。だからこそグッドウィンは上記引用の後半で説明するように、カベサ・デ・ヴァカの『体験記』にある種の「正直さ」を見出しているのである。すなわち、スペイン語原典においては、結果的に第三者の存在をほのめかすことになってしまうような受動態が使用されている点をグッドウィンは重要視しているのである⁶。このようにカベサ・デ・ヴァカの『体験記』に対する英訳を比べてみると、誰がヒーラーとして活躍したのか、ひいては誰が新大陸に足を踏み入れてその地を「発見」したのかという、植民地言説の核をなす主体と所有をめぐる議論に翻訳のあり方が大いに関係していることがわかる。

これに対してララミの小説 *The Moor’s Account* においては、エステバニコを中心としながらも、生き残った他三人のスペイン人コンキスタドールが、それぞれの方法で治癒行為に加わる様子が描かれている。例えばカスティジョは、医師であった父親の様子を思い出してエステバニコとともにカップping治療(“cupping”)をネイティヴ・アメリカンに施す。またカベサ・デ・ヴァカやドランテスもそれぞれ、旧大陸にて習得した知識を用いてヒーラーの役割を担うようになる⁷。

このようにララミは小説内でヒーラーとしての役割をエステバニコと他三人のコンキスタドールに対して偏りのないように与えているのであるが、そうした描写におけるある種の公平性とともここで注目したいのは、

ヒーラーという立場を持続するために必要な能力の描かれ方である。エステバニコがネイティヴ・アメリカンのヒーラーから学んだのは、薬草を保存する方法や薬草を練りあげて湿布を作る方法だけではなく、どのような衣装を身に着けるべきなのか、いかに患者を説得すべきなのか、というセルフ・ファッションングや語りの技術の重要性であった。そしてむしろその語りの力こそが、エステバニコを他三人のコンキスタドールと区別し、彼を自由へと導いたのであった。

Whenever I told stories around the campfire, I sensed that Cabeza de Vaca was anxious to rival them with his own, for he was a gifted storyteller. . . . The tales of our travels delighted Tahacha, and he offered us some furs to protect ourselves from the night chill. For the first time, the story of our adventures, supplemented by neither labor nor begging, had earned us not just a meal, but gifts of blankets. (224)

そもそもインディアンによる囚われの身であったエステバニコら四人は、いったんヒーラーとしての地位を確立すると、実質的な治癒の結果を示し続ける、すなわち、ネイティヴ・アメリカンたちの命を現実的に救うことよりも、ヒーラーとしての過去の成功物語を繰り返すことによって、衣食住を保障されるのみならず信頼や賞賛を得るようになる。そしてその語りの主導権を握ることがすなわち、自由を求める主体の生存を左右した。上記引用は、「物語」を語ることで生きのびるエステバニコとカベサが、「物語」の主権をめぐる競争の様子である。その過程でエステバニコは、語りによって自身が自由を得たとしても、逆説的に、自身が語りの奴隷になる危険の可能性をも理解するに至る。小説の後半でエステバニコは、彼らを崇拝する数百人のインディアンたちを従え、ある部族からある部族へと旅するヒーラーとなる。しかしはたしてその旅を永遠に続けたほうがよいのか、それはつまり、永遠に語り／騙り続け、永遠にセルフ・ファッションングを続けるかどうか—の選択にエステバニコは直面し、物語は結末へと

向かっていく。

本稿の初めに紹介した元奴隷のリチャード・ライトは、大西洋奴隷貿易で新大陸に連行されたアフリカ人には読み書き能力を持つ者もいたと述べた。その言に従うように、モロッコ系アメリカ人作家ララミの本小説では、エステバニコはアラビア語の高度な読み書き能力のみならず、スペイン語、ポルトガル語、ネイティヴ・アメリカンの諸言語を操る翻訳者兼ヒーラーあるいは、ヒーラーという翻訳者として描かれている。ララミの試みは、レイフォード・ローガンがエステバニコの最大の過ちを「『体験記』を書かなかったこと（“But Estevanico made one great mistake—he left no *Relación*” 314）」とした見解や、スペイン語から英語へ翻訳される際に生じた主体の誤認を修正する作業であった。つまりララミによる本作品 *The Moor's Account* は、スペイン人コンキスタドールのカベサ・デ・ヴァカが著した『体験記』^{re-frame}を書き改め、エステバニコに自由をもたらししたのは、書く行為とともに語る行為であったと示したのである。

3 クレオールたちのカスタ・ペインティング

ライラ・ララミの本小説 *The Moor's Account* の結末は、エステバニコ、ネイティヴ・アメリカンの妻、そして二人の間に生まれる子供の計三人が、ネイティヴ・アメリカンの共同体に留まることを示唆する。かつて、カベサ・デ・ヴァカは *La Relación* のなかで、エステバニコの出自について “negro alárabe, natural de Azamor” と記した。その表記の仕方に則れば、エステバニコの子孫は “negro alárabe, natural de America” と表すことができようか。そこで本稿のまとめとして、エステバニコの末裔に与えられうる “natural de America” という言葉の意味と、後に誕生したその表象の一例を見てみたい。

その手掛かりとなるのは、18世紀後半の南米における「国家」の創設について論じたベネディクト・アンダソン (Benedict Anderson) による以下の主張である。ここでアンダソンは、本国スペインではなく植民地で生ま

れた者たち、つまりクレオールたち (“creoles”) の矛盾する感情こそが、「アメリカ (人)」という認識を作り出す重要な要因となったと述べる。

The fact that early Mexican nationalists wrote of themselves as *nostros los Americanos* and of their country as *nuestra América*, has been interpreted as revealing the vanity of the local creoles who, because Mexico was far the most valuable of Spain's American possession, saw themselves as the centre of the New World. But, in fact, people all over Spanish America thought of themselves as 'Americans,' since this term denoted precisely the shared fatality of extra-Spanish birth. (62-63)

アンダソンが指摘したクレオールたちが、彼らの「虚栄心」を満足させるとともに、あるいは本国スペインの外部で生まれてしまったという「宿命」を受け入れるのを助けるために機能した文化的装置として考えられるのが、18世紀南米で流通した「カスタ・ペインティング (casta paintings)」という芸術形態である。(スペイン語の “casta” には、血統、階級、一族という意味がある。) クレオールであることが初期値であるならば、新大陸南米で生まれたカスタ・ペインティングの意図とは、初期値からの変位や変化を目で見てわかる形で示すことであつた。例えば、画像①に描かれるように、クレオールの存在自体とクレオール内部での階層が、明確に線引きされ定義づけられて示されている。最上位にあたるのが左上に示されるスペイン人との混血混濁であり、最下位とされるのが右下に示されるインディオと黒人との混血混濁である。かつてW.E.Bデュボイスが「20世紀の問題」として指摘した「カラー・ライン」という境界線の恣意性は、実は18世紀南米におけるカスタ・ペインティングにおいてすでに提示されていた。つまりカスタ・ペインティングは、人種民族の明確な線引きや階層づけをするという目的に反して、その線引きが虚構でありたやすく無効となる可能性をまざまざと示していたのであつた。

4 旅するヒーラー

さてこれまで提示してきた様々な物語から、アアロン・ダグラスが描くも失われてしまったエステバニコの壁画を回復^{re-frame}することはできたのだろうか。以上本稿では、16世紀にスペイン人カベサ・デ・ヴァカによって、“negro alárabe, natural de Azamor”と記されて以来、無言であったエステバニコに代わり、W.E.B.デュボイスらアフリカ系アメリカ人批評家たちがその声を発してきた経緯を確認した。さらに今日ではその批評史を背景に、モロッコ系アメリカ人作家ライラ・ララミが小説*The Moor's Account*において、エステバニコの物語を、さらには彼の子孫の物語を“negro alárabe, natural de America”へと拡大させてカベサ・デ・ヴァカの『体験記』を語り／書き直したことを明らかにした。

まとめにあたり、18世紀南米で創造されたカスタ・ペインティングが備えていた公共性に関わりつつ、1930年代北米の公共空間を占めた壁画という芸術ジャンルにいま一度戻りたい。ニューディール時代にアメリカ合衆国にて量産された壁画は全米で約四千点にのぼり、郵便局や学校、病院、博覧会などの公共の場に飾られた。ダグラスの壁画*Aspects of Negro Life*(1934)が飾られるショーンバーグ・リサーチセンターの前には、アフリカ系アメリカ人にとっての文字通りの治癒の現場であるハーレムホスピタルセンターが存在する。ハーレム・ルネサンスの時代を経て1930年代になると、このホスピタルセンター内部の廊下やそこで働く看護師のための控室には、アフリカ系アメリカ人芸術家ヴァーティス・ヘイズ (Vertis Hayes) やジョーゼット・シーブルック (Georgette Seabrooke) によって制作された壁画が飾られ、癒しの空間が生み出された⁸。その事実をとってみても、これら若き芸術家たちを自身の後進として従え、エステバニコの表象をもって20世紀前半のアフリカ系アメリカ芸術におけるクレオールの性質を開拓したアアロン・ダグラスもまた、己の任を全うした旅するヒーラーであったと言える。

註

- 1 『実践英文学』69号（2017年）における拙論を参照。
- 2 批評史上このモロッコ人に対しては“Estevanico”および“Estebanico”の二種類の表記がある。本稿ではライラ・ララミの小説における表記に従い、後者「エステバニコ」を用いる。
- 3 ライラ・ララミ（1968年生）は、現在カリフォルニア大学リヴァーサイド校教授として創作の授業を担当している。本小説は2015年ピュリッツァー賞の最終候補となった。
- 4 ここでライトが言う「野蛮人」(“the savages”)とはネイティヴ・アメリカンを指すが、この直ぐ後では“the natives”という表現を使用している。
- 5 “zaatar”とは、狭義には、中東に起源をもつオレガノを指すが、広義では、オレガノの他にバジル、タイム、セイヴォリーも含み、さらに、それら複数の薬草を混ぜ合わせたもの全体をも指す。
- 6 1851年版のスミスによる英訳においても、問題となっている下線部において一人称“I”は明示されていない。同場面で治癒を行っているのはカベサ・デ・ヴァカだけではないことが受動態の使用によってわかる。

When I came near their huts, I perceived that the sick man we went to heal was dead, for there were many persons around him weeping, and his house was prostrate, which is a sign that the one who dwelt in it is dead. When I arrived I found the eyes of the Indian rolled up he was without pulse, and having all the appearances of death, as they seemed to me, and as Drantes said. I removed a mat with which he was covered, and I supplicated our Lord as fervently as I could that he might be pleased to give health to him, and to all the rest that might have need of it. After he had been blessed and breathed upon many times, they brought me his bow, and gave me a basket of pounded pears. (Cabeza de Vaca, *Narrative* 73, translated by Smith, 下線強調は筆者による)

- 7 “cupping”は古くは紀元前1500年のエジプトでメディカル・パピルス（medical papyrus）として知られる研究書にも言及されていた民間治療である。紀元前1000年ころの中国、あるいは紀元前400年頃のギリシャでも確認されている。Kaya他、153頁参照。
- 8 アアロン・ダグラスがクレオール的主体としてのエステバニコを主題として描くために、ウィノルド・リス（Winold Reiss）経由で学んだキュビズムやアール・デコというクレオールの手法を選んだとするならば、それは、形式が内容を説明し、内容が形式を語ることをまさに示す芸術行為であった。

参考文献

- Aden, Alonzo J. “Educational Tour through the Hall of Negro Life.” *The Southern Workman* 65.11 (1936): 331-342. Print.
- Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. 1983. London: Verso, 2006. Print.
- Cabeza de Vaca, Álvaro Núñez. *The Narrative of Alvar Nuñez Cabeça de Vaca*. Trans. Buckingham Smith. Ulan Press, 2012. Print.
- , *Naufragios*. Libro de Dominio Público, 2013. E-book.
- , *The Shipwrecked Men*. Trans. Fanny Bandelier. New York: Penguin, 2007. Print.
- DuBois, W.E.B. *The Gift of Black Folk: The Negroes in the Making America*. New York: Square One, 2009. E-book.
- Goodwin, Robert. *Crossing the Continent 1527-1540: The Story of the First African-American Explorer of the American South*. New York: Harper, 2008. Print.
- Katzew, Ilona. *Casta Painting: Images of Race in Eighteenth-Century Mexico*. New Haven: Yale UP, 2004. Print.
- Kaya, Seyda Ors, et al. “Were Pneumothorax and Its Management Known in 15th-Century Anatolia?” *Texas Heart Institute Journal* 36.2 (2000): 152-153. Print.
- Lalami, Laila. *The Moor’s Account*. New York: Pantheon, 2014. Print.
- Logan, Rayford. “Estevanico, Negro Discoverer of the Southwest: A Critical Reexamination.” *Phylon* 1.4 (1940): 305-314. Print.
- Wright, Richard. “Negro Companions of the Spanish Explorers.” *American Anthropologist* 4.2 (1902): 217-228. Print.
- 深瀬有希子 「ニューデール期のアフリカン・アメリカン芸術家による壁画—ヘイズ、シーブルック、ダグラス」『実践英文学（実践英文学会）』（第69号）2017年、43～57頁。

画像①



作者不明, Casta Painting, 18th century, oil on canvas,
148×104 cm
(Museo Nacional del Virreinato, Tepotzotlán, Mexico)